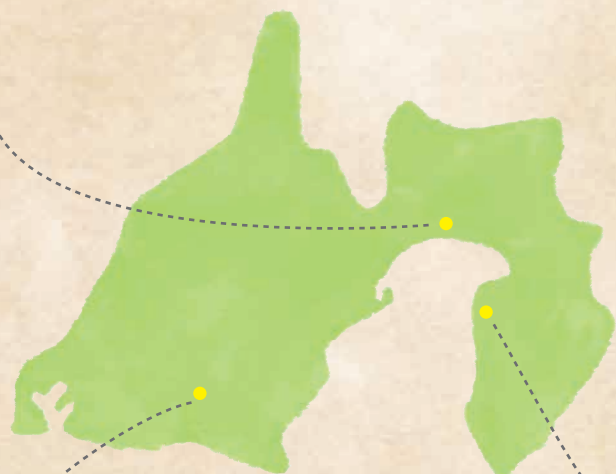


観光に新しい発想をプラス！ 各地で女性たちが頑張っています。

今まで注目されていなかった地域の魅力を引き出し、
新たな集客や地域の活性化に結び付けている
元気な女性たち。
彼女たちの多彩な活動の中に、
静岡県の新しい観光のヒントがありそうです。



茶畑レストラン ちゃの生

茶畑から田舎の魅力を発信

ご両親の他界をきっかけに、母親が興した農家レストラン「ちゃの生」を引き継いだ豊田さん。富士市北部の広大な茶畑とブルーベリー畑で、自宅を一部開放したレストランや、茶摘み、ブルーベリー狩り、季節に合わせたイベント開催など多彩な農業体験メニューを展開しています。平日は浜松で仕事をしているご主人も、週末は富士に来て豊田さんを手伝ってくれるそう。「父母が残してくれたこの土地に戻り、農業の素晴らしさに気づきました。食べることは命の巡りとつながっています。田舎独特のゆるりとした空間を活かしながら、地域を元気にしていきたいですね。」

- 茶畑レストラン ちゃの生
- 代表者 豊田 由美
- 富士市大淵 11253
- TEL 0545-35-0247
- URL <http://chanoki.i-ra.jp>
- 設立年 2008年3月

モットー
まずはやってみよう！



農事組合法人 あじさいグループ

手づくりの味で地域を元気に

地元を元気にしたい、お母さんたちが働く場所を作りたいという声から生まれた「あじさいグループ」。趣旨に共感した地域の女性が次々と参加し、「アクティ森」を拠点に、安心安全な手作りの農産物や加工品などを販売しています。2000年にはそば処「ほっとり」を開業し、2007年からレストラン「食体験ハウス ままmamma」の運営も担当。人気の「猪井」は、お母さんたちが開発したオリジナルメニューです。「活動を始めてから、主人も家事の協力をしてくれるようになりました。」と代表の森下さん。メンバー誰もが家族の理解があってこそ、安心して笑顔でおいしいものが作れるそうです。

- 農事組合法人 あじさいグループ
- 代表者 森下紀美子
- 周智郡森町問詰1115-1(アクティ森内)
- TEL 0538-85-4271
- 設立年 1991年4月
- 構成人数 女性43人

モットー
長く活動が続いていく、
みんなが元気に働ける事



NPO 戸田塩の会

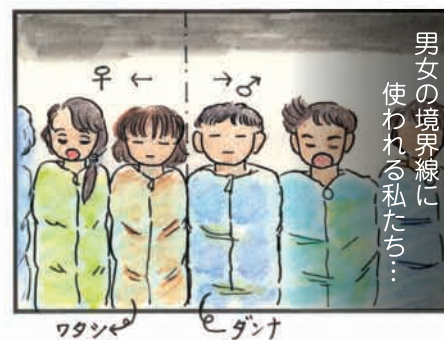
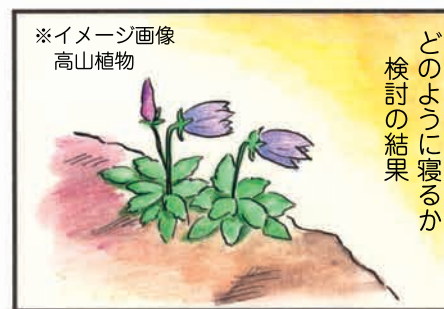
塩づくりで戸田をPR

漁獲高の減少、過疎高齢化に悩むなか、約1500年前、安康天皇に献上されたという戸田塩の復活で地区を活性化できないか、と女性たちが立ち上がりました。冬は寒さに震えながら海水を汲み、夏は海水を煮詰めて大量の汗をかき、健気に頑張る姿を見て、男性たちも次第に協力者になっていったそうです。注文は全国から舞い込み、作業場はいつもフル稼働。良い塩づくりのためには海外へも研修に出かけ、日本一の塩を目指しています。マーケティングの手法も学び、塩やにがりを使った菓子や化粧品を県内企業と開発。県内外から採塩体験を受け入れ、戸田のPRに努めています。

- NPO 戸田塩の会
- 代表者 菰田智恵
- 沼津市戸田3705-4 TEL 0558-94-5138
- URL <http://www.npo-hedashio.jp/index.html>
- 設立年 2001年2月(NPOの前身は1995年)
- 構成人数 女性14人、男性6人

富士登山の思い出

編集員 むらたみちこ



バッグ、手打ちでない蕎麦などなんでも、つくらしい地域の特産品を使ったメニューを作りましょうと提案したら、そんなの言い訳で言うんです。でも、あるんですよ。そこでシイタケを選んで井を開発し、評判も上々だったのですが、最初のうちはシイタケなんかでお金は取れないとか、その価値に気付いていなかったですね。外からアドバイスする人が入るのを感じました。

いでしょう。ただ個人で巡るには、酒蔵が点在しているし、車で行くのが難しいのが難点。そこで、複数の酒蔵をバスで回れるような仕掛けがあれば参加したい人は多いはず。さらに酒蔵ごとに地域で採れるおいしいものが用意されていたら、忘れられない旅になると思います。

座をやったりしておもしろいです。市野/朝市では地場食材を購入するだけでなく、地元での食べ方も体験できると、食文化も感動としてお持ち帰りできていいですね。現地ではこう食べていたのよ、とか土産話とともに家族と一緒に味わえば、旅の楽しさも2倍に広がります。





静岡英和学院大学
人間社会学部 人間社会学科
安福 恵美子教授
YASUFUKU EMIKO

観光による新たな 地域文化の創出へ向けて



近年、少子高齢化が進むにつれ、観光による「交流人口」の増大を期待してさまざまな取り組みが各地域においてみられる。なかでも、観光による地域活性化を目指し、地域資源を活かす取り組みが注目されている。このようななかで、女性による地域の特産品の開発・販売や農産物直売所の経営が地域の雇用創出に貢献している例など、地域活性化に対する女性のさまざまな活躍がたびたびメディアによって取りあげられている。

広く世界に目を向けると、「観光という場」における女性の活躍は世界の各地においてもみられ、それが女性の経済的自立や地位向上につながっていることが報告されている。たとえば、かつて家庭や地域内での使用に限られていた伝統手工芸品を観光用に製作・販売することによって、女性は従来の伝統的役割のほかに新たな選択肢をもつことが可能となったという報告からは、「女の仕事」が経済的価値を持つ労働として捉えられるようになったことが示されている。ま

た、宿泊施設の運営に関わる女性が主体的に観光に関わることによって、地域におけるネットワークを形成した事例などは女性のエンパワーメントとして注目されている。

世界各地でみられるこのような観光による女性の活躍は、宿泊施設など家庭的な対人サービスが重要視される観光形態において顕著であるが、ここで注意しなければならぬ点がある。それは、このような「家庭的な」要素が重要視される観光形態への女性の関わりを「女性の活躍」という視点だけから捉えてはいけないことである。観光は伝統的な女性の家事労働を公の領域に移行させた。そのため、女性は賃金労働と家事・育児労働との関係があまりに異なる場合が多いため、家事や育児の負担のほかに、観光によって生じた対人サービス増加により、二重労働という過剰な労働負担を抱える傾向にあるからだ。

「地域おこし」が叫ばれるなか、つぎつぎと地域資源の「商品化」が模索されるなかで、外部に

対して地域をどのようにアピールしていくのか。家事労働の「商品化」に内在する問題点も含め、地域における意思決定に男女がどのように参画していくのか、そのプロセスに注目しなければならぬ。国や地域レベルにおいて男女共同参画の実現が求められているなかで、地域資源（自然、文化、農林水産物など）を観光資源として活用する際、男女の対等なパートナーシップが形成されるかが重要である。

観光は新たな地域文化の創出に関わる。観光活動の特性である「他者（来訪者）との接触（交流）」という経験は、男女ともに地域にとって重要な経験となる。地域に対する来訪者のリピート率の増加は地域活性化への大きな要因となる。地域社会におけるさまざまな取り組みが続くなか、「観光という場」は地域社会を映す鏡となるであろう。



静岡県知事
川勝 平太
KAWAKATSU HEITA

集客アップを図るには 他エリアを知ることから

静岡県の魅力を増し、観光客を誘致するためには必要なことはなにか、と考えてきた編集部では、その答えを求めて川勝知事を訪ねました。観光や地域の活性化のために必要なこと、女性に期待することなどをうかがいました。



知事を訪問する『ねっとわあく』編集員
2010.8.23 インタビュー

県内で観光客が最も多いエリアである伊豆半島には宿泊施設がたくさんあり、おかみさんにはじまり仲居さんなど多くの女性が第一線で接客にあたっています。富士山静岡空港の開港により、海外から観光客が訪れる機会も増えてきました。文化や習慣が違う国の方を迎え、満足し

て滞在していただくためには、彼らのことを知る必要があります。ではどうすればいいか。その国を見に行けばいいのです。旅館、ホテルがどうなっているか、食事はどうか、周辺都市や田舎はどうか、と見ていくことで相手への理解が深まり、おもてなしのヒントを得られます。

旅行に出かける機会があるのなら、目的を持って戦略的にその地域を見てくることをすすめます。これは農業や漁業に関わる方も会社員の方も皆さんに言えることです。自分たちの住む街はどうしたら活気がでるか、集客を図れるか、そのためにどこを見たら

参考になるかと考え、手本となる土地へ出かけると、学ぶべきものが多いと思います。

たとえば金沢には日本料理の粋を堪能できる加賀料理があり、料理目当ての観光客が多く訪れます。静岡県は金沢以上に食材は豊富なのに料理で集客できない、なぜか。また、グリーンツーリズムが人気のいま、静岡県の農山村にも多くの方が訪れています。田舎の生活は不便なのが嫌だと感じている人もいます。そこで都会的な快適さを享受しながら田舎の生活を満喫するようにできないか、などと考えるがらほかの地域を見るわけです。

竹下政権のときに「ふるさと創生事業」として、各市区町村に1億円が交付されたことがありました。そのとき長野県小布施町では、家にこもりがちだった農家の女性たちをフランスへ連れて行き、観光名所だけでなくパリの田舎を見せたのです。そうしたら、「なるほどきれいだけど、私たちにもこのぐらいのことならできると」と、その女性たちが日本に戻るとまちづくりに取り組み始め、それにより、現在大勢の観光客で賑わう小布施町が創られて

いったのです。

私は、静岡県はどこにも負けないと思っています。伊豆半島はジオパーク（*）になるくらい優れた景観があり、多様な動植物が生きていますし、富士山があり、浜名湖というオアシスや天竜の美しい森林があります。先端技術でのものでづくりや、日本一の設備を誇る静岡がセンターで医療面の安心感が得られるなど、地球の理想型がここに集まっているとすら思っています。

「女性は外で働くより、家の中のことを第一にするべきだ」という通念が長い間あり、能力があっても活かす場に恵まれなかった方が多くいます。しかしこれからは、男女が共に力を合わせて物事に取り組み社会でなくてはなりません。観光などにおいてもお互いの長所を認め合い、役割分担をしながらやっていくことが重要です。

実践の時代のいま、とかく建前論が多い男性に対し、柔軟に物事を捉えられ、フットワーク軽く行動できる女性に期待する部分は大きいです。女性にはもっともっと外へ出て見聞を広め、観光や地域の活性化に積極的に関わってもらいたく思います。

*ジオパーク 地球科学的に見て重要、貴重な地質遺産を保全し、活用することで地域社会の活性化を目指す自然公園の一種。ユネスコの支援により世界各国で推進中。

Books & Cinemas

静岡大学
人文学部言語文化学科
准教授
森本 隆子さん



ヘンリー・ジェイムズ 『ある婦人の肖像』

ヘンリー・ジェイムズ 著
行方昭夫 訳
岩波文庫

独立心と感受性に富むアメリカ人女性イザベルが、イギリスからローマに及ぶ(自分さがし)の大旅行で、誤った結婚を選択し、破れ、苦悩の果てに歩むべき「まっすぐな道」を確信するまでを描く。筋書はありきたりだが、小説の展開は、失敗の原因となる叔父の莫大な遺産贈与が、実は肺病で死を覚悟する従兄のラルフの秘かな愛によって用意されていたという伏線を配し、ラストは、それを知ったイザベルが死の床に横たわるラルフの元へ駆けつけ、真実の愛を確認する場面で閉じる。断念せざるをえない人生の残りを愛する女に託してためらうことのないラルフの澄み切った心境は、男性中心主義文化の崩落を予兆しながら、どこか威風堂々、読む者の胸を打つ。

作者ヘンリー・ジェイムズは19世紀を代表する孤高の作家だが、ジェーン・カンピオン監督によって、ニコール・キッドマン主演、『ある貴婦人の肖像』のタイトルで映画化されて話題を呼んだ。

静岡大学4年
フリーペーパー『静岡時代』編集部
齋藤 頌さん



デミアン
ヘルマンヘッセ 著
高橋健二 訳
新潮文庫

やってらんね。そう思う時があります。面倒だったり、つらかったり、寂しかったり、理不尽だったり。なんか上手くいかない時ありますよね。でも、なんだかんだ、戻ってくる場所というものがあるもので、この本は僕にとってそういう場所の一つです。最近、ヘッセとか恥ずかし!なんて思っちゃうけど、あえて紹介してみますよ。いわゆるドイツの教養小説でありまして、扱うテーマは簡単に言うてアイデンティティの問題です。主人公がデミアンという少年に出会い、善と悪を内包した新たな世界への憧れを強めていくんですね。ともかく自分になるってことを絶えず問い続ける小説。(激しく壮大な)旅に出るなら、こういう場所から出発したいし、帰っても来たい。でももっといいのは、そういう感じ方さえも忘れてしまうことだったりして。というなんだか青臭い紹介、終わり。



ボーイズ・オン・ザ・サイド

監督：ハーバート・ロス
販売元：ワーナー・ホーム・ビデオ

あざれあ図書室司書
菊川 真紀子さん

旅を描いた映画が数多くあるのは、非日常の出来事が、自分の心と向き合う時間を作り、成長するヒントを与えてくれるからでしょうか。

今回紹介するのは、3人の女性が主人公のロードムービー。売れないシンガー、まじめなキャリア・ウーマン、男好きのセクシー・ガールが、旅から始まった友情を育てていく物語です。

軽快なテンポで始まる冒頭ですが、3人が新天地を目指す理由が明らかになるにつれ、物語は深みを増します。旅というきっかけがなければ知り合うことがなかったであろう、似ても似つかない3人。それぞれが抱える、エイズ、同性愛、シングルマザーという事情と向き合うなかで、徐々にお互いの人生に深く関わっていき、やがてかけがえのない友情で結ばれます。

ちなみにタイトルは、“男はオマケ”というニュアンスだとか。観終ったあと、女の友情をしみじみとかみしめること間違いなしの作品です。あざれあ図書室で借りることができます。

57号の感想をお寄せ下さい

- ◆QRコードから
 - ◆E-mail kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp
 - ◆FAX 054-251-5085
- いずれかの方法をお願いします。



ねっとわあく

2010/10/10 Vol.57

発行日/平成22年10月10日
〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/西岡あおい
編集員/村田美千子、増淵礼子、川野泰寛、杉本雅美
アドバイザー/平野雅彦
デザイナー/利根川初美

「ねっとわあく」は年2回(10月、3月)発行します。県民生活センター、県内の男女共同参画センター、市町役場、公民館、公立図書館、文化会館などで配布しています。会社やご友人にもぜひ回覧してください。